

讃岐の文学研究 (1)

— 壺井 栄・中河与一・黒島傳治 —

The Literature in Sanuki District (NO. 1)

OKA YA AKI O
岡 屋 昭 雄

壺井 栄 研 究

1. はじめに

先ず、壺井栄の経歴を紹介する。

年	年齢	事 項
1899 (明治32年)	0	8月5日、香川県小豆島坂手村(現在の内海町)に、父岩井藤吉、母アサの五女として生まれる。
1906 (明治39年)	7	6歳未満で坂手尋常小学校に入学する。
1912	13	小学校を卒業、草壁町の内海高等小学校に入学する。
1915 (大正4年)	16	5月、坂手村郵便局の事務員として就職する。母親過労のため倒れる。
1918 (大正7年)	19	過労のため肋膜炎となり、また、脊椎カリエスとなる。3月、兄弥三郎亡くなる。
1922 (大正11年)	23	村役場に勤める。同郷の黒島傳治、壺井繁治と交友を深める。
1952 (大正14年)	26	壺井繁治と結婚し、豊多摩郡世田谷町字三宿(現在の世田谷区三宿)に住む。12月母アサ死亡する。
1927 (昭和2年)	28	夫繁治が、プロレタリア文学運動の内部対立から、アナーキストに襲われ負傷する。
1928 (昭和3年)	29	浅草橋の時計部品御商に記帳係として雇われる。「婦女界」が募集した読者の生活記録に応募して「プロ

		文士の妻の日記」が入選する。
1929 (昭和4年)	30	時計店をやめる。佐多稲子を知る。生涯を通しての友人となる。文学の芽をつけてもらう。
1930 (昭和5年)	31	夫繁治は小林多喜二とともに逮捕される。栄は「戦旗」を守るために奮闘する。
1934 (昭和9年)	35	雑誌「進歩」に処女作「崖下の家」をのせる。
1936 (昭和11年)	37	小説「大根の葉」を書く。これが栄の出世作となる。
1939 (昭和14年)	40	3月、「風車」を「文芸」に、5月、「桃栗三年」を「新潮」に発表する。
1940 (昭和15年)	41	1月、童話り処女作「祭着」(まつりご)を「同盟通信」に、3月、「暦」を「新潮」に発表する。夏、佐多稲子と朝鮮に旅行する。
1941 (昭和16年)	42	3月、「暦」で第4回新潮文学賞を受ける。「新潮」に「望郷」を発表する。
1942 (昭和17年)	43	「婦人朝日」「中央公論」「新潮」「文芸」などに、次々に新作を発表する。
1944 (昭和19年)	45	最初の童話集『夕顔の言葉』『海のたましい』(後に『柿の木のある家』と改題)刊行する。
1945 (昭和20年)	46	5月、『緋の着物』を毎日新聞社から刊行する。
1946 (昭和21年)	47	9月、『海風』を新日本文化協会から刊行する。
1947 (昭和22年)	48	7月、童話集『十五夜の月』を刊行する。
1948 (昭和23年)	49	童話集『あんずの花の咲くころ』を小峰書店から、『おみやげ』を好江書房より出版する。
1951 (昭和25年)	52	『柿の木のある家』で、戦後第1回児童文学賞を受ける。『母のない子と子のない母と』を光文社から発刊する。
1952 (昭和27年)	53	『坂道』『母のない子と子のない母と』で、芸術選賞文部大臣賞を受ける。2月、「二十四の瞳」を「ニュー・エイジ」に連載、12月、光文社から発刊
1954 (昭和29年)	55	11月、『風』を光文社より発刊。『母のない子と子のない母と』が民芸ユニット作品で映画化、『二十四の瞳』が松竹で映画化される。

1955 (昭和30年)	56	3月、『風』で第7回女流文学賞を受ける。昭和文学全集『平林たい子・壺井栄集』を角川書店から発刊される。
1956 (昭和31年)	57	5月、筑摩書房から『壺井栄全集』全25巻の刊行が始まる。11月、『二十四の瞳』の中国語訳を上海新文芸出版社より発刊する。
1957 (昭和32年)	58	『小さな花の物語』を平凡社から刊行する。
1960 (昭和35年)	61	2月、新選現代日本文学全集『壺井栄集』を筑摩書房より刊行する。
1961 (昭和36年)	62	10月、軽井沢で、急性喘息の発作を起こし、慶応病院に入院、37年3月退院。
1962 (昭和37年)	63	4月、NHKテレビで『あしたの風』の放映を開始 5月喘息再び悪化し、阿佐ヶ谷の河北病院に入院。
1964 (昭和39年)	65	9月、『壺井栄児童文学全集』（全4巻）を講談社から刊行。『二十四の瞳』が東京12チャンネルから放映される。肝臓障害のため東大病院に入院。
1965 (昭和40年)	66	静養のため、ほとんど軽井沢で生活する。『母と娘と』を新潮社から刊行する。
1967 (昭和42年)	67	6月23日、東京中野区の熊谷病院で、気管支喘息のため死去する。9月30日、小平霊園に埋骨する。

以上が壺井栄の経歴の概略である。

2. 小豆島と壺井栄

ここではまず、『母のない子と子のない母と』を取り上げることとする。この童話を書かれたのは、終戦後、3年後の昭和23年（1948）の事である。そして昭和25年（1951）に、戦後第1回目の児童文学賞を受賞することとなる。この年、光文社から出版する。この作品は、毎日小学生新聞に「海辺の村の子ども達」と言う題名で連載され好評を博し、後に前掲のような題名になったのである。この物語の舞台は香川県小豆島であり、壺井栄が壺井繁治と結婚するまで住んでいた島である。栄の住んでいたところは小豆郡内海町で、関西方面の船

の発着点でもある。毎日のように海を眺めつつ、この島から大阪や東京へ行くことを夢みたことは当然予想される。貧しいが故にこの夢はやがて実現すべく努力することとなる。幸いにも黒島伝治、壺井栄と交友を深める事になる。そのきっかけは栄が坂手村の郵便局に勤め、手紙を扱いながら、彼らから文学的影響を受けることとなる。この郵便局での仕事を通して村の人たちの生活を知り、文学の素養を享受することになる。郵便局という所から村の人たちの生活が見えてきたのである。

武田寅雄⁽¹⁾は、壺井栄の生涯を以下の三つの時代に分ける。この事は、栄の生活の基盤に関わっての分類であり、説得力がある。しかし、作品の分類では違う観点を採用することが必要であることは言うまでもない。

- (1) 小豆島時代〔明治32年～大正14年〕
- (2) 東京時代〔大正14年～昭和10年〕
- (3) 作家時代〔昭和10年～昭和43年〕

小豆島時代は、壺井栄にとっては、作家としての基盤作りの時代と把握することができるであろう。つまり、小豆島は、江戸時代から醤油の醸造が盛んであり、栄の父親の岩井藤吉はこれらの醤油屋の樽屋の親方で、自ら数人の職人を雇っていたという。栄は、10人兄弟姉妹の5女として生まれた。彼女の生まれた時代は、手工業的な家内工業から次第に大資本による機械工業への発展期であった。したがって、彼女の家もその影響をまろに受けて倒産してしまった。栄の13歳の時である。15歳の時などは、渡海屋をしていた父親に従って、小舟で薪の原木運送のような重労働もやっていたと言う。この事によって、どんな状況にあらうとも真剣に対応すれば生きることにはできる、と言う信念のようなものを獲得したと言うのである。この間父親にねだり『女学校講義録』を買ってもらい熱心に読みふけたとも言う。また高松にある香川師範学校を卒業し、小学校教師をしていた兄弥三郎が毎月送ってくれる『少年少女』（時事新報社刊行）『少女世界』（博文館刊行）をくまなく読んだと言う。このとき読んだ「峠にそそぐ涙」は生涯にわたって心に残っている、と述懐する。栄は兄の

影響を受け、学校の先生になりたいという希望をもつようになる。当時としては贅沢とも思える高等小学校に入学し、ここも優秀な成績で卒業する。16歳の時、道一つ隔てた所にある郵便局に出かけ局長に「私を使ってください」と頼み込み、局長から字を書いて見ろ、と言われ、字のうまさによって採用されることになる。

彼女の人間形成の大きな影響を与えたものは、幼年期から少女期にかけては祖母であり、母であり、郵便局や役場の窓口から見た村人達の生活であった。親友であった佐多稲子は『壺井栄論』（新選現代日本文学全集所収）に、「壺井さんには特質として、語る、ということが言われるようにおもう。」と述べるが、栄の貧しい時代からの親友であるが故の的確な指摘である。武田は、「この『語る』文学の源泉は祖母イソ（天保5年 1834～大正5年）にあるようである。」と推論する。しかし、筆者は小豆島の風土・風俗の持つ特質ということをもう一点あげておきたいという意見を持つのである。古くから信仰篤く、人情味溢れる小豆島を生涯忘れることの出来なかった栄の精神風土に着目したいのである。昭和47年7月に発刊された浜田一夫著の『小豆島の方言』（丸島印刷）によれば、小豆島の方言は、内海、西村・草壁・安田・苗羽（のうま）、土庄・淵崎、大部・北浦の四地区に分かれると言う。かつて、備前津山藩と讃岐藩とにわかれて統治された影響が方言として残っていることも注目していいであろう。小豆島は、「加子の浦」と言われ、室町期には細川管領の重要な海上輸送船団の基地であり、豊臣秀吉の朝鮮征伐、小田原城攻略にも水主（水夫）として参加した。江戸時代は、天領として徳川幕府に仕え、大阪を中心として活躍する。中山の八木氏所蔵の古文書（1660～1670）によれば以下のようになっていたという。

家数	3,566軒	人口	20,065人
御加子	6,203人	船数	700石積～20石積
			281艘

以上のことから明瞭のように一家に二人の水夫がいた事になる。元禄2年（1688）に加子役が廃止となり、水夫の一部は大阪・九州方面に出稼ぎに行ったという。回船問屋は、島の石材を江戸・大阪へ、素麺を中国・九州に輸送す

るようになる。塩も遠く北海道まで運んでいた。

明治になると、島の特産物である醤油、石材の販路は主要には阪神地方であり、毎年若者達が出稼ぎに行くところは、阪神地方と言うこともあって、上方言葉が自然に流れ込んで来たことは当然であろう。今でも内海町を中心として上方訛が残っている。しかも、密教の真言宗が多く、今でもお墓に小さな家を作っているものもある。

俚諺も、1.天候 2.災害 3.豊凶 4.信仰・運勢 5.その他に分けられ、「墓に布団も着せられず」（墓に布団を着せるぐらいなら生きている間にもっと親孝行しなさい、の意味）「つらくせず、水まわせ。」（食事時、来客があれば、嫌な顔をしないで、カゴに水を入れて量を増やし来客にももてなせ、の意味）等の具体的な「諺」も今に残る。

著者が主張したいのは、以上の事から、島の持つ風土の豊かさ、周りがすべて海に囲まれ、海の彼方へ行きたい、と言う夢を託すトポス（場所）であること、阪神地方との関係が強いことを挙げたいのである。筆者が内海町へ行った時、「…さかい」「おもろいなー」という大阪方言が聞かれたことも指摘して置きたい。また、明日をも知れない水夫の仕事をしていたが故に家族、とりわけ子どもに託す思いが強いことも挙げねばならないであろう。このような風土・習慣・習俗を少女時代まで経験したことが壺井栄の児童文学の骨格を作っていることは言を俟たないであろう。

(注)

- (1) 武田寅雄『小豆島と五人の作家』（明治書院 昭和61年）2頁。ちなみに五人の作家とは生田春月、壺井栄、尾崎放哉、壺井繁治、黒島伝治のことである。
- (2) 前掲書 4頁 15～16行

3. 『母のない子と子のない母と』について

『母のない子と子のない母と』の基底にあるのは、栄の故郷・小豆島の心的風景・心象風景である。冒頭は以下のように書き出されている。

小豆島を知っていますか。もしも、よく分からないようでしたら、一度、

日本の地図を広げてみてください。瀬戸内海の東のほうに小犬のような形をした、小さな島が見つかるでしょう。その小犬は今も、うつむいてごはんを食べているようなかっこうをしています。その背中に「小豆島」と書かれているはずです。

まるで、アズキつぶのような小さそうな名前ではありますが、数えきれないほどたくさんある瀬戸内海の島々の中で、小豆島は、淡路島につづく、二番目に大きな島なのです。周囲百五十キロといわれていますから、それでだいたいの広さが分かると思いますが、もっと分かりよくいえば、この島の中に三つの町と十三の村があります。ごく近ごろのこと（昭和二十六年の春）、いくつもの村がいっしょになって、一つの町になりましたが、これからはじまる物語はそのまえのことになります。小豆島は、神懸山（寒霞溪ともいう）のもみじで人に知られていますが、もっとめずらしいことは、日本でたった一か所、オリーブが実ることで名高い島なのです。オリーブの木は、外国でも地中海にのぞんだ、あたたかい国にしか育たないのだそうですから、小豆島もそのようにあたたかく、たいそう景色のよい島です。けれど、冬のあいだは、島じゅう潮風にふきさらされて、オリーブのやわらかな枝もゆすぶられつづけています。その風の中に、苦しいことや、悲しいことや、うれしいことがくりかえされて、また春が来るようです。あんなにひどい海風が、じつは、小犬の島の足にあたる岬の山でやわらげられて、オリーブの育つにちょうどよい風になって吹きつけていると聞いたら、島の子どもたちだって、きっとおどろくでしょう。（オリーブに吹く風）から

以上が『母のない子と子のない母と』の冒頭部分である。小豆島に対する愛情がなければ書けない文章であろう。舞台背景が実に静謐な語り口調で語られている。島に対するイメージを作りつつ、これから展開する物語の舞台回しをたくましくして表現するのである。そして、「これは、オリーブ園の近くの村のお話です。」にうまく連続させているのである。

関英雄は、金の星社発行の『母のない子と子のない母と』（1981年9月）に

「■ 作品にふれて (1) 暖かさと強さ—壺井栄さんの人間味」を執筆し、以下のように述べる。

私が壺井栄さんの作品を初めて知ったのは、昭和17年、太平洋戦争中に出版された『新作・少年文学選』（島崎藤村編、新潮社）という文壇の作家たちの書いた少年少女向き短編を集めた本の中の、「十五夜の月」という小説を読んで感動したときだった。栄さんが瀬戸内海の小豆島で育った少女時代の思い出をもとにした小説だが、貧しいながら祖母を初めとする家族の愛情の美しさが、題名のような十五夜の満月の光に照らされてかがやいていた。特に心に残ったのは、戦争中に書いた作品なのに、そのころ流行した戦争を賛美することばはかげもなく、生まれたふるさとの土を愛し、そこに生きる人びとのひたむきな暮らしを愛することだけが書かれていたことだ。

戦争に反対ですなどとさげば刑務所に入れられる時代に、栄さんは反対とさげぶ代わりに、平和こそ人びととの暮らしにとって一番大事なものであることを、この作品で語っていた。⁽¹⁾

また関は以下のように壺井栄の人柄について述べる。

栄さんが「久しぶりに小豆島へ行って来ましたから」と言って、阿佐ヶ谷に近い杉並区天沼に越した私の家に、小豆島名物のオリーブの実のびん詰めをわざわざバスに乗って届に来てくれたことなど、きのうのこのように思い出す。

ここで見落としてならないのは壺井栄に『随筆・小説 小豆島』（光風社書店 昭和50年8月15日発刊）があることである。そのなかに書かれていることが童話の素材として多く採られていることについては誰も指摘してはいない。「萩」と題する随筆は、そっくり「妙貞さんの萩の花」になっている。また、ここに書かれている随筆から直接的ではないが、虚構化されて取り込まれている

ものも多い。以上の事からも壺井栄は小豆島の生活から人生そのものの骨格をつくっていたことが分かるとともに、小豆島を真実愛していた事も側々と伝わって来る。ここで随筆から「萩」を取り上げてみる。

幾年かを、妙貞さんは穴の中に暮し、そしてある日、遂に、だれも知らぬまに、そのいわくありげな生涯を終えていました。穴居してからその日の目を見ることもなくやせて青白くなっていた妙貞さんに、村人はとりすがって泣いたといえます。その時になってはじめて、妙貞さんがどこからきたのか、年は幾歳なのか、何のために出家していたのか、追われる罪状がなんであったか、何一つ知らないことに気がつきました。わかっていることは、妙貞さんのおせわにならぬ家が一軒もなかったという、ただそのことだけでした。「幕府の廻し者だったかもしれん」などと、知ったかぶりをいう人もあったとか。しかし、ともかくも、村人の手でねんごろにとむらわれて、妙貞さんは今も小豆島の百戸に足らぬ小さな村の協同墓地の入口に、女たちの感謝と、明日の悲願をうたえられています。コケむしたその小さな墓標は年中花にかこまれています。ことに萩の花の見事さは季節のくるごとに墓石におおいかぶさった小さな風にもゆれ動いていました。

村に一人、妙貞さんに名前をもらった娘がいます。萩の花ざかりだったので、萩枝とつけられました。萩枝が四歳ぐらいのとき、おばあさんは、彼岸まいりのお墓の道で、孫に話しかけられました。

「お前がお母さんのおなかの中にいるときに、どうぞ、やすやすに生まれますようにと、このばあちゃんが妙貞さんにたのんだんじゃ。お乳が出ますようにとたのんだんじゃ。ちょうど萩の花が咲いたときさかい、そんなら、これをねんねの名にもらいます、いうて、それで萩枝とつけたんじゃ」

小さな萩枝は満足に目をかがやかせて、はアとためいきをし、

「萩枝は、こんなきれいな花のことかいの。うれしいのう、ばあちゃん。」

といいながら、おしげもなく萩の花を手折っては、花筒にさしました。萩枝！父を父となし得ぬ男を父として、そのため顔をかくして外出もせぬ女を母として、萩枝は生まれました。乳母奉公のために町の呉服屋へ住みこみました。⁽³⁾

以上、童話「妙貞さんの萩の花」と随筆の「萩」とを比較するとほとんど違っていないことが分かる。『飛ぶ教室』『ふたりのロッセ』等の作品で有名なドイツの童話作家エーリヒ・ケストナーは、「自分が小さい時のディテールを大人になっても持っている人は童話を書ける」と言っている。壺井栄はまさにケストナーが述べるような天性の稟質を抱持していることになるであろう。このような意味で『随筆・小説 小豆島』は、彼女の童話の原点を示す重要な随筆である、と把握できるであろう。

もう一つ紹介する。

ぼんさん ぼんさん どこいくの
このみち とおって すっかいに

これは私の郷里小豆島のわらべ唄である。今もうたわれているかどうかは知らぬが、私の子供のころなど、しょっちゅう口をついて出てきた唄である。そのころは小学校も一年生からお習字というのがあって、新聞紙をよつ折りにして何枚かとじた草紙をぶら下げて学校へ行っていた。その草紙が隅の隅こまでまっ黒くなるまでおけい古をするのである、虎硯という虎猫色の荒砥石のような硯に級長さんが大きな水さしで水をくぼってくると。一個三銭か四銭の墨をごしごしする。たちまちのうちに消炭をとかしたような墨汁ができる。それをたっぷり筆の穂にふくませて、

ぼんさん ぼんさん どこいくの

とはじめる。しかしこの唄は「す」の字の時だけなのだ。「ぼんさん ぼん

さん」で筆を下ろし、「どこいくの」で横にひいて一の字をかく。「この道通って」で十文字まですすみ、「すっかいに」で結んではなすと「す」の字になる。先生は抑揚をつけて筆の力の入れどころやぬくところを教えるのである。だが、今思い出してもなつかしいこのすの字の唄がほんとに小豆島だけのわらべ唄であるのかどうかはたしかではない。けれども、小豆島というところが、何かというと酢の料理をすところだということは出来そうだ。祭りだ、節句だ、祝いだというと、まずどここのいえでもおすしである。子供たちは一升徳利をさげて村に一軒ぐらいいかない酒屋へやられる。酒屋の道で出あう子供たちはおたがいをなぶりあうのである。

ぼんさん ぼんさん どこいくの
このみち とおって すっかいに

そのまたおすしのすっぱいことといったら。あれは酢が多すぎたのか、砂糖が少なかったのか、何しろ三日も四日ももたせるにはあれほど酢を利かさなくちゃあならなかったのだろう。だが、今だになつかしく思い出すほどうまかったのは、魚の新しさのせいもあったろう。年に一度阿波からやってくる人形芝居の見物や、花見などには鯖の押しずし、鱈のすがたずしがお供をしていた。家でたべるのは大ていごもくずしと相場はきまっていたが、ごもくずしでもちゃんと魚の酢漬けが入っていた。何しろ小豆島では一家の主婦はどこでもすしづくりの名人なのだ。すしをつくって亭主のきげんをとるなどということもあるくらいで、だから、ぼんさん、ぼんさんの唄も生まれたのかも知れぬ。(以下略)⁽⁴⁾

以上の事から、壺井栄が、少女時代の事を実に鮮やかに・鮮明に記憶していることが分かるであろう。菅忠道は、壺井栄の文学の特徴について以下のように述べる。「壺井栄の作品には、童話でも小説でも、自分のおいたちから題材をとったものが多いといえます。それでいて、自分の体験だけをせまく書いているのではなく、いつでも時代の歴史をえがいているのです。」⁽⁵⁾と述べつつ、

「その庶民の、よろこび・かなしみ・いかり・などの生きたすがたをえがくことで、壺井の文学は独特なものです。」⁽⁶⁾と評価をする。さらに「どんなにつらくいくるしいめにあっても、けっしてちからをおとしたりひかんしてあきらめてしまうようなことのない、さくしゃのいきかたにふかくかんけいします。」⁽⁶⁾と榮の児童文学の特質を鮮やかにえぐり出すのである。

ところで、『母のない子と子のない母と』に登場するおとら小母さんについて伊藤始は、おとら小母さんは作者の分身として把握すべきだと以下のように述べる。

・・・壺井榮は、戦後の日本人の心のよりどころとなるようなおとら小母さんをつくりだしました。これは、作者壺井榮の分身だと思います。

榮の生き方に一貫しているのは、たくましい楽天性と、母性的な優しさです。そうした彼女だから、敗戦後の子どもたちの貧しさや不幸をそのままにしておけなかったのです。おとら小母さんのような、明るく優しい人物を創造することによって、傷ついた子どもたちを温かく抱擁しようとしたのです。

同時に、人間を不幸におとし入れる戦争を、静かに告発しているのです。それは、『二十四の瞳』の大石先生にも、共通して言えることです⁽⁷⁾。

以上の伊藤の指摘は、鋭く、かつ正確である。つまり、おとら小母さんは作者の分身であると言うことは当然としても、榮の生き方そのものと即応している事なのである。戦後も親戚の子どもを預かったり、他人の不幸を見過ごすことのできない性格だったことから首肯できることである。

おとら小母さんには、一人息子の獅子雄がいた。無事に、元気に育つようにと言う願いが込められた名前である。しかし、少年航空兵だった獅子雄は、練習機の故障のため墜落し、終戦の前年に死んでしまう。主人も大阪の空襲で亡くしてしまう。一人ぼっちになった小母さんは故郷である小豆島に帰って来る。そして、小母さんが子どもを可愛がるのは、獅子雄のことが忘れられないからである。自分の悲しみを子ども達を可愛がることによって補償しようとし

たのである。四郎の身体の温もりで獅子雄のことを思い出したり、背中におぶった子どもから息子が戻ってきたような錯覚を起こしたりする表現の卓拔さは、母性愛あふるる作家である、と言っていいであろう。この作品には方言がふんだんに出て来る。「のほず」「やいと」「ばんげ」「かんこ舟」「かんころだんご」等々。決して違和感なしに作品の流れに即してほほえましさを加えている。換言すれば会話の豊かさを生み出していると言ってもいいであろう。民謡・童謡・ことわざ・慣用句も上手に生かしながら、かつ分かりやすく、島の風土や子ども達の生活をリアルに描き出すことに成功している。

鳥越信は、新美南吉よりも壺井栄を評価する、と言う立場をとる。^⑧

『二十四の瞳』の大石先生は、栄の兄弥三郎が香川師範学校を卒業し、教師となっていたこともあり、かつ、自分自身も教師になりたいという思いを抱いたこともあり、作品の世界では、教師という職業を生きたことになる。また作品に出て来る砂浜に落とし穴を作って先生をその落とし穴にいれ、児童が騒いだ事件も実際にあった事件であったと、島の人は語っていることも付記して置きたい。

壺井栄は、筑摩書房から刊行された『壺井栄作品集』の5巻の「あとがき」に〈おとら小母さんのことなど〉に以下のように述べる。

この小説の主人公はやはりおとら小母さんだと私は思う。もしも自分の名前だったらあまりうれしくないような名前をもらったおとら小母さんが、大そう人気があったということは、この小説を書いたころの日本が、たくさんのおとら小母さんをうみ、そのおとら小母さんたちの中で、この小説のおとら小母さんが、美しい心のままにその悲しみや喜びを表現できたからだろうと思う。しかし、現実の日本のおとら小母さんは、このようには動けなかったにちがいないし、それがまた当たり前だったろうと思う。小説ならこそ、こんな風に、理想化した小母さんになれたし、それだけにまた、おとら小母さんをあこがれる人たちがたくさん出てきた。ということは、おとら伯母さんのようなやさしさがいかに求められていたかということになるかもしれない。そんなことから、作者の私までが大変に心

やさしい人間であるかのように誤解され、おとら小母さんのように心の美しい、やさしい女性にちがいないという意味の読者の手紙を、少し大げさにいうと、山のようにもらった素朴な読者の中には手紙のあて名を、「おとら小母さんのような壺井先生」だとか、また「おとら小母さま」と勝手に私をおとら小母さんにすりかえて当惑させたり、直接に私の家へ訪ねてきたり、家出をしてきたりする少年少女が、今日まであとをたたない。そんな少年や少女たちは、結局がっかりして帰ってゆくのだが、こんな罪作りなような役目も、この小説はしているようだ。(以下略)

つまり、おとら小母さんと作者である栄が混同されて困ったと言うのである。さらに、如何にこの作品がよく読まれていたかの証拠でもある。したがって、戦争後の日本が、おとら小母さんのような心優しい女性を求めている事にもなる。その時代に求められている人物・主題をどう提出したらいいか、の問題もここでは浮き彫りとされることをあからめている。すなわち、時代を先取りした作品を如何に提出したらいいか、が作家に求められている、と把握できるであろう。⁽⁹⁾

上掲のことは1956年の夏、信州上林にて執筆されたものである。

最後に、「作品発表覚え」に以下のようにこの作品が出来上がる経過が書かれる。

1948年、毎日小学生新聞に、「海辺の村の子供達」の題名で連載。

1951年11月10日、「母のない子と子のない母と」と改作改題して光文社より刊行。⁽¹⁰⁾

(注)

- (1) 壺井栄『母のない子と子のない母と』(金の星社 1981年9月) 244 頁
- (2) 前掲書 247 頁
- (3) 壺井栄『随筆・小説 小豆島』(光風社書店 1975年8月) 149 ~ 150頁
- (4) 前掲書 110 ~ 111頁
- (5) 壺井栄・林芙美子『少年少女 日本文学全集 15』(講談社 1962年4月) 374

頁

- (6) 前掲書 374 頁
- (7) (1)の 254～255 頁
- (8) 鳥越信『子どもの本の百年史』(明治図書 1973年10月) 169 ～ 170頁
- (9) 壺井栄『壺井栄作品集 第五巻』(筑摩書房 1956年8月) 194 ～ 195頁
- (10) 前掲書 195 頁

4. おわりに

郷土の生んだ作家壺井栄を取り上げた。このことは、小豆島の気候・風土・風俗等を含めて研究することが肝要である、と言う観点からである。したがって、戦後三年間を闊して書かれた『母のない子と子のない母と』を中心として纏めた。今後、初期作品から、視野に入れつつ、壺井栄の作家としての特徴を深め、さらに重厚な研究として充実させることにする。

中 河 与 一 研 究

1. はじめに

筆者は、大学2年生の時、中河与一に直接逢ったことがある。それは広島大学教育学部東雲分校の薄暗い図書室の隣に面した会議室での出来事である。故郷である広島が原爆に遭遇して広野になっているという情報によって学習院におられた清水文雄氏は、この地で教育によって寄与したいという一念で広島大学に帰られたのである。その清水氏が友人の中河与一を招かれたのである。それまでに、清水先生の講義「平安朝女流文学史」「和泉式部研究」を受講していた機縁もあり、三島由紀夫、川端康成、伊東静雄、保田与十郎、佐藤春夫、久松潜一、斉藤清衛、蓮田善明、栗山勉等と一緒に文芸文化運動もされていたことも我々学生の知的飢えを癒してくれたこともあり、清水氏を尊敬していたこともある。また、清水氏は、『和泉式部集』(岩波文庫)の解説、注をつけられた方として我々学生の憧れの対象であった。その著書の内容が十分分かりもしない

のにもかわからず、文庫本の『和泉式部集』を上着の内ポケットにそっと忍ばせていたものである。自分だけがそうしているかと一人悦に入っていたところ、後から分かったことであるが、他の何人もの学生にそのような者がいてがっかりした思い出もいまだに消えずに残っている。清水氏の和泉式部に対するまなざしの温かさの中に、中河与一の『天の夕顔』の持つ世界の美しさを解釈して下さったこともあったことは確かである。私達の青春の血をたぎらせた『天の夕顔』の作者に会えることがどんなに強烈な感動を与えたかは当事者で無ければ納得してもらえないであろう。とりわけ、最後の場面は、一言一句忘れずに胸に焼き付いている。主人公である瀧口が今は亡き女性あき子にその悲嘆の形象化として空に花火を打ち上げる場面は、私の心に未だ消えずに残っている。現実には逢うすべもないことは分かってはいても、あき子がいる彼岸である空にその思いのたけを伝える手段として花火を考えたのである。

その著者中河与一に逢える、ということなので胸の高なりを抑えることが出来なかった。『天の夕顔』という作品にはモデルがあることの紹介だったように記憶する。ただ何か知らないものにつき動かされて滂沱のごとく涙が溢れ出した事だけが思い出される。その意味する内容は未だに分からない。このような感動だってあるということを書いて置きたい。

以上のような鮮烈な印象を中河与一との出会いで経験したのであるが、最近、再度『天の夕顔』を読み直してみても改めて感動した。このような美しい恋愛がこの世にあるのだろうか、恋愛の極地を示すものではないか、と評価し直したのである。『天の夕顔』は、雑誌「日本評論」（昭和13年新年臨時号）に発表された作品である。定本は『天の夕顔』（雪華社刊行 昭和38年12月）とされる。瀧口が京都大学の学生時代に下宿していた家の娘あき子は、すでに人妻だった。当時、彼女の夫は洋行中で、瀧口とあき子は、姉弟のような友情の限界を保ちつつ交際する。瀧口は大学を卒業して、富士山頂観測所員となり、深夜の空を眺めつつ、ただひたすらあき子のみが慕わしく、その後、越中の峰に入り、彼女の名を狂気のように叫び続ける生活をするようになる、それでもあき子を忘れることができず、山を降りることとなる。その時、すでにあき子は47歳、「もう5年したらおいで下さい」と瀧口は告げられ、再び山に入ることに

なる。その後、1ヶ月で5年という日、彼女が末期の思いで書いた手紙を受け取ることになる。あき子は苦悩して自死したのである。「かつてあの人がつんだ夕顔を夜空へ花火としてうち上げたい。天にいる人がそれをつみとるのだ」と考え、今はそれを喜びとするのです。」これが、瀧口の生涯をかけた夢のエピソードだったのである。発表当時、永井荷風は激賞し、海外ではカミュは、名作として認めたが、ほとんど文壇では無視されたものであった。それは中河が文壇に所属していなかった事もその一因であろう。

2. 『天の夕顔』の背景を探る

この間の事情について中河自身以下のように述べる。

「天の夕顔」を発表したのは十三年の一月で、僕が四十一歳の時であった。『日本評論』の一月十五日発行の新年特集号であった。

ただあの作品は、発表当時、誰も見向きもせず、所謂黙殺せられて一行の批評さへ出なかった。

ただ発表して数日後、永井荷風から殆ど考へられないやうな懇篤な手紙が来た。

その手紙は毛筆で几帳面に書かれ、三枚に及んでゐた。そのまま筆録すると次のようなものであった。

——御手紙拝見致し御送り下され候御創作天の夕顔早速拝誦いたし、この前単行本所載の短篇は今回の大作、夕顔の素描なること始めて承知致し、尚更敬服致し、我日本の文壇も夕顔の一編を得てギョーテのウエルテル、ミュッセの世紀の児の告白、この二編に匹敵すべき名篇を得たる心地致し、又故人二葉亭が浮雲とも比較すべきものと存候、小生読過の際何の訳とも知らずトリスタン曲中の最後の場悲しみのモチーフを聞くが如き心地に相成り候、主人公が当世風の柔弱男子にあらずして、剣術を修め禅僧めきたる人物なること最も感服致し此あるが故に全篇飽くまで日本固有の情調を帯び候点最もうれしく存申候、（以下略）⁽¹⁾

以上のように中河は述べる。永井荷風は、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』に匹敵する作品として最大級の評価をする。また、永井は、二葉亭四迷の『浮雲』にも比較すべきものというのである。とりわけ筆者が注目したいのは「日本固有の情調を帯び」ていることに触れ、永井が評価していることである。確かに中河の描いた世界は平安時代のものであり、「つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天くだり来むものならなくに」（和泉式部）が題名の直後に据えられていることから明白のように中河もその意識で『天の夕顔』を書いているのである。また、作品中に高内侍の「わすれじの行末までも難ければ今日を限りの命ともがな——」を紹介する。

以上二首の和歌の世界がこの作品の主要なトーンとなっていることは明白であろう。空を見る和泉式部の姿勢には、挫折した心がほの見える。心は中空に預けている。「もの思う」とは、すぐれて平安時代の歌人達の中核に位置していた情念であり、かつ時代思想そのものであった事は今更云うまでもないであろう。式部は、恋に生きた女性であり、「中空」（なかとら）と言う語彙（キーワード）で平安時代の女性を考察したのは、竹西寛子であった。まさにわが心から魂の抜けた状況を思い見れば納得できるであろう。一般的には、人間は希望に燃えた時空を見る。また、思い屈したときも空を見る。式部のは後者であることはいうまでもない。自分を愛してくれる人が空から降りてくるのではないかと胸をときめかせても、現実には叶わぬことは式部とても知っている。だのに心と身体は、完全に分裂してしまった状況なのである。空の青さに心惹かれ、鳥のように自由に羽ばたきたいと思い、死んだ人間が行く世界、「空のみ」とは日常的には現在も使っている語彙である。なのに、夢よりはかなき世の中と秘かに眩きつつも、期待を懸けねば生きて行けないこともまた和泉式部は知り尽くしているのである。

命はいつ尽きるとも分からないのであり、だからこそ人生を慈しむのである。「むしろそこはかかない心を書きつけたものと考え、ひとしおにその優しさが身にしみるのでした。」と作品中に中河は書きつける。

以上のことから永井の指摘するところは鋭く、かつ正確である、と把握できるであろう。

ここで『天の夕顔』の最後の場面を取り上げることにする。

それでもわたくしは今、たった一つ、天の国にいるあの人に、消息する方法を見つけたのです。それはすぐ消える、あの夏の夜の花火をあの人のいる天に向かって打ち上げることです。悲しい夜夜、わたくしは空を見ながら、ふとそれを思いついたのです。

好きだったのか、嫌いだったのか、今は聞くすべもないけれども、若々しい手に、あの人がかつて摘んだ夕顔の花を、青く暗い夜空に向かって華やかな花火として打ちあげたいのです。

わたくしは一夜、狂気したわたくしの喜びのために、花火師と一緒に野原の中に立ったのです。やがて、それは耳を聳するさく裂する音と一緒に、夢のようにはかなく、一瞬の花を開いて、空の中に消えてゆきました。

しかしそれが消えたとき、私は天にいるあの人が、それを摘みとったのだと考えて、今はそれをさえ自分の喜びとするのです。

すなわち、主人公の瀧口は、苦しい恋愛の最後のドラマとして、一世一代の演出をしたのである。演出という言葉が悪ければ、真剣勝負と置き換えてもいいであろう。

ところで、中河は香川県で生まれたのではないことが彼の著書から分かる。以下この事に関わって紹介する。

ぼくが生まれたのは香川県の坂出と長い間信じ、年譜などもずっとさう書いてきたが、或る日ふと少年時代の古い写真を見つけて、その裏を見ると、与一 一歳と書いてあって、浅草公園地早取写真館、江崎禮二製と印刷してあった。してみると、ぼくは東京生まれといふことになる。明治三十年二月二十八日であった。

恐らく父与吉郎が岡山の第三高等学校医学部を卒業して、上野桜木町の丸茂病院にインターンとして勤め、傍ら今の順天堂病院で外科の医療にあたってゐた頃に生まれたのではないかと思ふ。さうすると、僕の出生地は

香川県ではなく東京といふことになる。ハッキリ言って東京生まれにちがひない。

ただ東京にいつまでゐたのかはわからない。その後青森県の八戸市大字米田町宝生堂医院で外科と婦人科の主任をしてゐたことが、父のその頃の手帳を見ると書いてある。ただそんな医院があつたのかどうかさへ、今はしらべてもわからない。(中略)

父が坂出病院といふ洋風の病院を香川県坂出町(今は市になってゐる)の東のはずれの長堤(ながのて)に建てたのは明治三十二年一月十八日で私立坂出病院と名づけられた。だからぼくはその時から香川県の住民になつたのかと思ふ。⁽²⁾

以上が中河による出生のことである。

その後、岡山県に連れて行かれる。この事について以下のように述べる。

…五、六歳の頃非常な病気になつたらしく、どんな病気であつたかはわからないが、母は父の医療にまかす事が出来ず、自分の実家の黒住教のおかげを受けさせると言つて、ぼくを岡山県片瀬町大内の祖父母の家へつれていった。母は冬でも水をかぶつて、水ごりをするやうな健康で熱血の人であつた。⁽³⁾

つまり、中河は病弱であり、母親の影響によって育てられたと言うことが注目されるのであつて、このことは彼の作品の底流を揺曳することとなる。『天の夕顔』の基底には、母性的な思想が流れていることは、当然であり、かつ主人公の瀧口にしろ、あき子にしろ、あまりに母性的でありすぎた為に滅亡したとも把握できるのである。父性的であれば、危機は超越できたとも捉えられる。にもかかわらず、母性的であつたが故に、悲劇的にドラマとして成功したのである。

中河は、清水文雄と同じ仲間の文芸文化集団の影響を受けたが故にこのよう

な作品が生まれたとも言える。

中河が、最初に受けた失恋について次のように述べる。

中学校を卒業した翌年十九歳の時、大正五年十月七日の昼すぎ、雨模様の日、駅から電話がかかって来て、荷物をとりにきてくれといふ。それで車夫がそれをとりに出かけた。ぼくの従姉とその小さな妹がきた。

ぼくの青春に思いがけぬ暴風が起こった。それはぼくの一生を変へたと言っていいかもしれないほどの暴風であった。

異性についての関心はフロイトが言ふやうにほんの少年の日に始まるものらしい。(中略)

ぼくは嘗て彼女のことを「絵より美しい人」と書いたことがある。

この頃の美人の標準は何と言っても岡田三郎助描くところの健康そうな人であるか、さもなければ夢路の描く弱々しい病的な女性であった。どちらも顔はやや面長で、背のすらりとしてゐるのが特徴であった。(中略)

然し二人の間には何事もなかった。それほど純粹であり精神的であった。

(中略)

ぼくの母が何か注意を彼女にしたのかも知れなかったし、いづれにしても自分のうちに帰ってゆく気にもなれないままに岡山にある彼女の母親の姉のうちに行ってしまった。(中略)

…大正七年の七月二日、彼女はコレラになって、あっけなく死んだといふ通知を、彼女の母親からもらった。

そこには母親の深い後悔と、娘に対する憐憫の感情がめんめんと書かれてゐた。その手紙は読むに堪へなかった。⁽⁴⁾

以上のことも『天の夕顔』の世界と連続するものであろう。清潔な恋の世界を述べつつ、中河のナルシズムの世界を豊かに示すものであろう。そしてこの事は、中河の作品世界を通底するものとして把握してもいいであろう。なお、私生活では夫人中河幹子さん(歌人)に女性問題で困らせた、という。したがっ

て、中河与一の愛の美しさの極限の宇宙を示すものと把握できる。実生活と仮構の世界は混同してはならないことは当然であり、だからこそ美しいとも言えるであろう。

(注)

- (1) 『天の夕顔前後』(古川書房 1986年6月) 88～89頁。「荷風の激賞」というタイトルで書かれたもの。この第三章は、日本のみならず、外国でも評価されていたことの自信が生まれた背景について述べる箇所が多い。『天の夕顔』の最初の書き出しの数行を摘記すると述べることから、与一が最初の数行に、全力を注いだことが分かる。「——信じがたいと思はれるでせう。信じるといふことが現代人にとって如何に困難なことかといふことはわたくしもよく知ってゐます。それでゐてもつとも信じがたいやうなことを、もつとも熱烈に信じてゐるといふ。この狂気に近い話を、どうか判断していただきたいのです。

私は一つの夢に生涯をかけました。わたくしの生まれたことの意味は、だから言ってみればその儂げな、しかし切なる願ひを、どこまで貫き、どこまで持ちつづけたかといふことになるのです。馬鹿馬鹿しいと云って、人はおそらく身体をふるはして私の徒労を笑ふかもしれません。それが現代です。しかし私にとって、それは何事でもあり得ないのです。私は現代に生きて、もつとも堪へがたい孤独の道を歩いてゐるやうに思はれます——」

- (2) 前掲書 12頁。「病弱だった少年時代」のタイトルで書かれたもの。
 (3) 前掲書 13頁。
 (4) 前掲書 28～31頁。「絵より美しい訪問者」と言うタイトルで書かれている。「天に嘆き地に悲しめど奪はれしわが喜びは帰り来たらず」「人も見ず外にも出ず二十日経ぬけふ雨の日を濡れて歩めり」の二首の短歌を作っている。激しいショックを受けていることがよく分かる。

中 河 与 一 の 年 譜

大正4年(1916) 18歳 丸亀中学校を卒業する。この頃より絵画に興味を持ち、しばしば写生に行く。傍らに与謝野晶子、シェリー、バイロン、谷崎潤一郎、大杉栄などを散読する。「香川新報」の新年懸賞小説に中河哀秋のペンネームにて投稿、掲載される。

- 大正九年(1920) 23歳 4月2日, 同郷の紙間屋林卯吉の三女幹子と結婚, 幹子は津田女子英学塾に在学中で, 学生結婚のはしりであった。
- 大正10年(1912) 24歳 6月, 処女作「悩ましき妄想」を発表, 秋, 幹子ともに白秋を小田原の「みみづくの家」に訪問, 一泊した。
- 大正11年(1922) 25歳 4月, 歌集『光る波』を上田書店より発刊。短篇「踊」を「早稲田文学」に発表する。
- 昭和5年(1930) 33歳 1月, 『形式主義芸術論』を新潮社より発刊する。
- 昭和12年(1936) 40歳 1月, 萩原朔太郎, 佐藤春夫らと共に「日本浪漫派」同人に加わる。
7月, 『万葉の精神』を千倉書店から刊行。
- 昭和22年(1947) 50歳 2月『逢ひし日』民風社刊行。
8月, 『綺楼奇譚』民風社から発刊。
- 昭和23年(1948) 51歳 3月『天の夕顔』をロマンス社から刊行する。
4月, 幹子, 共立女子大学国文科の教授となる。
10月, 『愛恋無限』を大有社より発刊する。
- 昭和27年(1952) 55歳 12月, 『悲劇の季節』を河出書房から刊行。
- 昭和28年(1953) 56歳 3月, 『失楽の庭』を河出書房から刊行。
4月, 『愛恋無限(上)』を三笠文庫として発刊。
- 昭和30年(1955) 58歳 5月, 『新恋愛論』を角川書店から発刊。
8月, 『高原の少女』を河出書房より刊行。
- 昭和34年(1959) 62歳 7月, 『愛の漂泊者』(『漂泊者』改題)を角川書店から刊行。『探美の夜・完』を講談社から。

以上, 中河与一の年譜の概略を紹介した。

3. おわりに

筆者が『天の夕顔』を評価するのは, 人間が人間であることの証は, 「愛すること」を中核に据えるからでもある。確かに, 今, 人間の危機と言われている。

にもかかわらず、人間が生きていくことに真摯でなくなりつつあるように思えてならない。自分を真実の意味で大事にする人こそが人（他人）を愛することが出来る、と考え続けてきた。したがって、無責任に人を愛することは人を不幸にすることは目に見えている。だからこそ、と強調したいのである。『天の夕顔』の世界が新鮮に見えて来るのである。中河は、平安時代の思想を閲しつつ現代人の生き方を明示し得ている、と評価したいのである。

筆者がかつて作者に逢っていることのみならず、すぐれて今を生きる人間に熱いメッセージを発していることを述べてこの小稿を終ることとする。香川県高等学校国語教育協会が『香川の文学散歩』（著作者「香川の文学散歩」編集委員会 代表 松川進 1992年2月）を刊行し、香川県の文学を視野に入れつつ、簡潔に香川県全域にあいわたって紹介していることも評価したい。香川県の文化・教育のルネッサンス的な意味を担うものとなることは言をまたないであろう。以上、今回は、中河与一の『天の夕顔』を中心として論究した。

黒島傳治研究

1. はじめに

筆者の担当している講義・平和論で黒島傳治の「二銭銅貨」を扱っている。受講した学生は、日本にこのような貧しい時代があったことに驚愕する。貧しいが故に差別されということが分からない時代になっていることを教師はどう考えたらいいのだろうか、この疑問はいまもって筆者には解決できていない。にもかかわらず、貧しいが故に差別が生まれることを粘り強く大人である教師は今の児童・生徒・学生に教えてやらなければならないことだけは確かである。郷土小豆島の出身ということ以外に、現在人間が見失っている貧しい時代の悲しみが豊かに描かれている作品を教材としなければならないのである。筆者が中学校の生徒にこの教材を扱ったとき、日本にこのような時代があったのか、とびっくりしていた。筆者は、この教材を同和教材として位置づけつつ、人間が生きることの根元に関わって、人間は生まれながら平等と言うことが如

何に空しいものであるか、を実感させたいのである。我々の周りには、人間の尊厳を阻害するものが多く存在し、人間が人間として生きてゆく為には、このこと、つまり、自己の人権・生きる権利だけを守り通すという強い意志、実行力が求められるのである。他人の人権が無視されていることを見て見ないふりをすることが差別になることを分からせなければならないのである。そして誰でも人間として生きていくことに意味のある世にする義務があることを身体にわからせることである。「そんなことを考えるのは無駄だ」「今が幸せならそれでいいでしょう」という若者も多いことは事実であるが、だからこそ人間としての生きる権利、つまり人権に対する認識を育成しつつ、どんな事があっても人権を守り抜く主体的な人間にしなければならないのである。

にもかかわらず、自分の人生に真摯に立ち向かえと、いま声高に叫ばなければならないのである。確かに今の社会は、汚いもの、不用になった物・者が捨てられる時代である。老人は粗大ゴミとされ、異端は排除される。情報は、中央に集中し、地方からの発信はほとんどない状況である。山口昌男の「中央と周縁」ではないが、中央を活性化するためにも、周縁である地方が発想の転換をしつつ、中央の横暴に歯止めをかけなければならないのである。

以上の意味で黒島傳治を学ぶことは、今の時代があまりにも表面的な幸福を求めているが故に、日本が貧しい時代の生きざまをあからめることが必要となるのである。

2. 黒島傳治の主要な経歴

明治31年（1898）

黒島傳治は明治31年12月12日（1898）香川県小豆郡苗羽村（現内海町）苗羽2201、父の黒島兼吉は、畑5反、山2町をもつ自作農で、鯛網の株をもち、漁期には網引きにも出ている。母はキク。傳治はその長男。明治35年、弟早太が、同38年には弟光治が、同44年には妹米子が、大正4年には妹ツヤが生まれている。

明治38年（1905）傳治7歳、4月苗羽小学校に入学。

明治44年（1911）13歳。

3月苗羽小学校を卒業。4月3年生の中学に当たる五カ村立の内海実業学補習校に入学。一年上級に壺井繁治がいた。海軍兵学校を志望していた壺井は間もなく大阪の中学校へ転校した。

大正2年(1913) 15歳

師範学校に試験を受けたが失敗した。

大正3年(1914) 16歳

3月内海実業補習学校を卒業し、船山醤油株式会社に醸造工として入社。

大正4年(1915) 17歳

約1年ほどで船山醤油を退職、講義録や文芸雑誌を読み始める。

大正5年(1916) 18歳

この頃あらゆる書物を手当たりしだい読み始めたと言われる。黒島通夫のペンネームで投稿した短歌、小説の習作が没後、発見される。

大正6年(1917) 19歳

この頃村の岩井栄(壺井)を知り、その友人で大阪難波病院の看護婦をしていた岡部小咲と親しくした。肋膜炎のため帰島した岡部は短歌を作り、小説も書く少女だったが、大正8年5月には肺結核のため死亡した。黒島通夫の名で「呪われし者より(K姉に)」140枚が残っている。秋に上京、三河島の建物会社に勤務しつつ、小説を書いた。

大正7年(1918) 20歳

建物会社を退社し、神田の暁声社(養鶏雑誌を発行)の編集記者となる。小石川小日向台町の八百屋の二階に下宿。アテネ・フランセに通ってフランス語を学んだ。この頃、トルストイ・ドストエフスキー、チェホフ、志賀直哉らに傾倒する。牛込神楽坂の芸術倶楽部で開催された早稲田大学主催の定期文芸講座で、早稲田の英文科の学生であった壺井繁治に出会い親しく交わった。

大正8年(1919) 21歳

春、早稲田大学予科へ第二種生として入学。この試験は壺井の友人で、栗田という理工科の学生が代わって受け、合格したものという。(壺井『全集』第三巻の回想文より) 徴兵検査で甲種合格となる。第二種生には、兵役猶予

がなく、召集を受け、11月20日、東京を立ち、一旦小豆島に帰った後、12月1日姫路の歩兵第十連隊（第十中隊第四班）に入營。衛生兵となる。東京をたった日から大正11年7月12日までの「軍隊日記」が書かれる。

大正10年（1921）23歳

5月、除隊まで210日ほどになったが、シベリア派遣となり、1日姫路を発ちウラジオストックに向かった。シベリアではラズドリニ陸軍病院に衛生兵として勤務した。ここでロシア語を学んだ。

大正11年（1922）24歳

3月25日肺炎の疑いで入院。ニコライエスク陸軍病院に転送された。後、ウラジオストックから病院船で広島に帰り、広島衛成病院に収容された。5月8日、姫路衛成病院に移され、7月11日兵役免除。郷里小豆島に帰り、療養生活を送りつつ、再び創作活動を始める。

大正12年（1923）25歳

3月「電報」「窃む女」などを執筆。9月上京の予定をたてるが関東大震災のため一時断念。12月「砂糖泥棒」「まなかひの棒」「田舎娘」等を執筆。

大正13年（1924）27歳

4月、弟の光治が東京高等師範学校に入学。10月「田園挽歌」を、11月、「崖の上」を執筆。

大正14年（1925）27歳

初夏の頃、数編の短編を携えて上京、世田谷太子堂の壺井繁治の家に寄宿した。6月28日、同郷の石井トキエと結婚。7月、河合仁、壺井繁治、坪田譲治らの同人誌『潮流』に「電報」を發表し、好評を受けた。同誌の同人となる。9月「まかないの棒」を同誌に發表。『銅貨二銭』（のち「二銭銅貨」と改題）「老夫婦」を執筆。10月最初の反戦小説「結核病室」（のち「隔離室」と改題）を『潮流』に發表。10月から11月にかけて「半鐘」「まな板と摺古木」「村の網元」「ある娘ある親」（のち「ある娘の記」と改題）「農夫の子」（のち「農夫の鞭」と改題）等次々發表する。この年の暮れ、壺井の家を出て池袋に移った。

大正15年・昭和元年（1926）28歳

1月「二銭銅貨」を『文芸戦線』に発表、好評を受ける。6月、「村の網元」を『地方』に、8月「踏台」を『文芸戦線』に発表。11月にプロレタリア文芸連盟が改組され、プロレタリア芸術連盟が発足する。同月、千田是也、小堀甚二、赤木健介らとともに『文芸戦線』の同人となる。

昭和2年(1927) 29歳

1月「小豆島にて」を、3月「彼等の一生」を、4月「戦争について」を『文芸戦線』に発表。同月「春の一円札事件」を『解放』に、5月、詩「五月祭の農民」「脚をおられた男」を『文芸戦線』に発表。6月、青野季吉、葉山嘉樹、蔵原惟人、林房雄、小堀甚二らとプロレタリア芸術連盟を脱退、労働芸術家連盟の創立に参加。9月「橈」を『文芸戦線』に、「本をたづねて」を『文芸倶楽部』に発表。秋、中村星湖、犬田卯、和田伝、鎌田研一らと「農民文芸会」を結成、10月から機関誌『農民』を創刊。10月7日、『東京朝日新聞』に「シベリアにて」(のち「穴」と改題)を発表。同月、第一創作集『豚群』を春陽堂から刊行。10月「渦巻ける鳥の群」を書き、12月「入営前後」を『文芸戦線』に発表。12月5日、正宗白鳥が『読売新聞』で『豚群』を批評して期待される新人として評価する。

昭和3年(1928) 30歳

1月「農夫の鞭」を『文芸戦線』に、「崖の上」を『自由評論』に、2月、「渦巻ける鳥の群」を『改造』に、鶴田知也との共同執筆「野田争議の実状」を『文芸戦線』に発表。同月8日妻トキエと協議離婚した。5月、「田舎娘」を『新潮』に、「脚の傷」を『文芸戦線』に、「穴」『文芸戦線』に、発表する。同月「橈」が左翼文芸家連合編の反戦文学集『戦争に対する戦争』(南宋書院)に収められた。6月、「草にころぶ」を『文芸戦線』に、7月、「氾濫」を『改造』に、8月、「葉山嘉樹の芸術」を『文芸戦線』に発表。8月第二創作集『橈』を改造社より刊行。「バルチザン・ウォルコフ」を『文芸戦線』に発表。

昭和4年(1929) 31歳

1月「氷河」を『中央公論』に、「捕虜の足」を『近代感情』に発表。この頃杉野ユキと再婚し、府下中野町3521に住んだ。4月妹米子上京。5月

「題を××した小説」(のちに「済南」と改題)を、6月「武器」を『文芸戦線』に発表。7月「反戦文学論」を『プロレタリア芸術教程』第一篇(世界社)に発表。杉並高円寺493に移転。秋、前年5月の済南事件を調査するため、済南・天津・奉天を旅行する。10月、「蚊帳と偽札」を『文学時代』に、11月「土鼠と落盤」を『文芸戦線』に、12月「海の第十一工場」を『中央公論』に発表する。

昭和5年(1930) 32歳

1月『水河』を日本評論社より、3月『パルチザン・ウォレコフ』を天人社より刊行。後者は発禁となり、作品をさしかえて6月、天人社から『雪のシベリア』と改題して刊行する。5月『秋の洪水』を塩川書房から、6月「鎌と鎌の五月」を『プロレタリア文学』(白揚社)創刊号に「浮動する地価」を『経済往来』に発表。7月『浮動する地価』を改造社から刊行。8月、「醬油工場にて」を『新潮』に発表。この月房州に遊んだ。9月19日長女耀子が生まれた。11月、長編『武装せる市街』を日本評論社より発刊。発売禁止にあった。同月、政治的に反共の立場を強く示した労農芸術家連盟に不満を抱いて伊藤貞助、今野大力、山内謙吾らと脱退、「文戦打倒同盟」を結成、機関誌『プロレタリア』を創刊(翌年1月の第2号まで)。12月、ナップ(全日本無産者芸術連盟所属の日本プロレタリア作家同盟)に加盟。翌6年5月24日の第3回大会で中央委員に選ばれた。12月「兵匪」を『改造』に発表。

昭和6年(1931) 33歳

1月「我々は新段階を進まねばならぬ」を『プロレタリア』に、2月「国境」を『戦旗』に、4月「農民文学の問題」(3回)を『東京朝日新聞』に、6月作家同盟に農民文学研究会を作った。8月「刺のある籬根」を『新潮』に、「北方の鐵路」を『文学時代』に、11月10日「防備隊」を『文学新聞』に、12月、「坊主と犬」を『新潮』に発表する。

昭和7年(1932) 34歳

2月「前哨」を『プロレタリア文学』に、「聞く文学・聞かせる文学」(3回)を『東京朝日新聞』に、3月「名勝地帯」を『大衆の友』に発表。4月宮本顕治に、『プロレタリア文学』紙上で、「前哨」を〈立ち遅れ〉として批判さ

れた。3月「明治の戦争文学」を『明治文学講座（四）』（木星社書院）に発表。

昭和8年（1933）35歳

早春の頃百貨店で咯血，中野区野方町上高田87の自宅の病床で小林多喜二の虐殺を聞かされた。6月『文化集団』の創刊に参画，7月「作家と模倣」を『文化集団』に発表。夏，療養のため家具等を小石川の弟光治に預け，小豆島に帰った。8月18日から約70日間咯血が続いた。

昭和9年（1934）36歳

春，苗羽2234に19坪ほどの家を見て，東京の荷物を引き取り，傷痍軍人として恩給を受けながら療養した。7月7日，東京区裁判所で新聞紙法違反罪により禁固2ヵ月，罰金20円，執行猶予4年の判決を受けた。

昭和10年（1935）37歳

3月「血縁」を『文芸』に発表。4月13日長男一実が生まれた。6月から以後一年余り病床についたきりであった。8月「今野大力の思ひ出」を『文学評論』に，8月「海賊と遍路」を『文芸』に発表。

昭和11年（1936）38歳

この年山羊を飼い始めた。12月「私の最も印象の深かった1936年の作品」を『文学案内』に掲載する。

昭和14年（1939）41歳

6月，岡山県都窪郡早島町の傷痍軍人療養所に入ったが，8月自宅に帰った。11月30日，父兼吉を失った。

昭和15年（1940）42歳

1月1日二女知子が生まれた。病状は良くなかった。一日1時間程度執筆を続けた。

昭和18年（1943）45歳

10月17日自宅にて死去する。

以上が黒島傳治の主要な年譜である。

3. 「電話」と「二銭銅貨」を中心として

壺井栄は、黒島傳治の思い出について以下のように語る。

くそまじめ一点ばりとしか思われていないようなあなたの地味な生涯の中にも、人なみに頬に血のさすようなことともあったそれを、ふと私は今ここに書いておきたくなったのです。黒島傳治さん！あなたがもしも、まだ生きておられたとしてもこれから私が書くことは、おたがいに微笑をもって語り合える、そういう事柄でもありますし、もしも生きていられたとしたら、事あたらしく私がここに書くほどのことにはならなかったかもしれぬ、そういうものでもありましょう。(中略)

こう書き出すと、私たちはまるで恋人同士だったように思われそうですね。そしてまた、そのような誤解をうけそうなふるまいを、私たちは堂々としたきたように思います。あれは大正五・六年頃でしたらうか。村の郵便局につとめていた私は、突然あなたから手紙をもらったと記憶しています。何しろ、数え年十七歳の私が、十九歳の少年であったあなたから手紙をもらったのです。封書の裏に名前を書かずによこしたあなたの手紙に、私は堂々と署名して返事を書きましたね。もしかしたらあの時、封じ目に糊をしないで私は出したように思います。あれは十七歳の私の、同僚のひやかしに対する胸をはった思いであったのです。(中略)

…たしか「青テーブル」という四頁の小雑誌を同封した手紙をくれ、交換してよませてくれといってきました。「青テーブル」にどんなことが書いてあったか全然おぼえていませんけれど、その短歌の欄に黒島通夫というあなたのペン・ネームがあったのを忘れません。後年の作家黒島傳治がこんなところから二葉を出していたなど私にきづく筈がありません。

(中略)

公明正大と大袈裟な看板をかかげて、指一本触れ合わぬあなたとの交際を、私は母にも話してありましたのに、あなたはあなたの両親に、知れるまでかくしていましたね。私が私の母をほめると、あなたはあなたのお母さんのことを嘆いていましたね。「うちの母親は根性が悪い女ですよ」と。

しかし今そのことを思うとき、私はあなたの人をみる目のたしかさと、私の甘さを同時に感じます。⁽¹⁾

以上、壺井栄が黒島傳治の思い出を語ったものである。小豆島での事である。同じ島で、男性が女性に手紙を出すことが村人の噂になることは、それだけに村（小豆島という村）の濃密な時間があった事にもなる。傳治の母親は、自由結婚は絶対許さない、長男であるが故に百姓の出来る、親の気に入った女でなければ母親は許さないと言うことが前掲の傳治が栄に語った会話なのである。年譜にもあるように咲子さんが大阪から帰ってきたこともあって傳治は、急速に咲子さんに近づく事になる。文学少女であったこともあるが、それより、大阪という都会に憧れていたこともあるであろう。しかし、その恋も咲子さんの死によって、あっけなく終る。傳治の心に重たいものを残しているはずである。栄の父も母も傳治が栄の恋人であった、と思っていた事だけは確かである。

これとは別に傳治の文学に対する憧れは小豆島という閉鎖的な島にいたこともあって、かえって強烈であったことを強調しておかなければならないであろう。毎日のように海の彼方を望見しつつ、熱い憧れを燃やし続けたことは想像に難くない。逆手港には大阪行きの船が発着するのを見ているとすれば、

傳治は、「海賊と遍路」に次のように述べる

私はしかし、小さな頃から和やかな瀬戸内海の自然に親しむよりは、より多く人間と人間との関係を見て大きくなった。貧しいものの悲しみや、露骨なみにくい競いや、諂いをこれ事としている人間を見て大きくなった。欲のかたまりのような人間や、狡猾が鼻頭にまでたどっているような人間や尊大な威ばった人間がたくさんいるのである。

約十年間郷里を離れていて、一昨年帰省してからも、やはり私の心を奪うものは、人間と人間との関係である。郷里以外の地で見聞きし、接触した人と人との関係や性格よりも、郷里で見るそれの方が、私には、より深い、細かい陰影までが会得されるような気がする。⁽²⁾

つまり、傳治が述べることは、人間と人間との関係が何ともやりきれないと言うのである。小豆島から出たいと言ふことの背景には、人間関係のしがらみを破りたいということなのである。とりわけ、傳治のように狭い枠に納まりきれない人間にとっては、やりきれなくなるのは当然であろう。この背景が分かる
と初期作品である「電話」(1923年3月)の世界のもつ意味は明確となる。

冒頭は以下のようになっている。

源作の息子が市の中学校の入学試験を受けに行っているという噂が、村中にひろまった。源作は、村の貧しい、等級割一戸前も持っていない自作農だった。地主や、醬油屋の坊ちゃん達なら、東京の大学に入っても、当然で、何も珍しいことはない。噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の中学校へやると云うことが、村の人々の好奇心をそよめた。

源作の噂の、おきのは、隣家の風呂をもらいに行ったり、念仏に参ったりすると、「お前とこの、子供は、まあ、中学校へやるんじゃないかいな。銭が仰山あるせになんぼでも入れたらえいわいな。ひゅゅ。」と他の内儀達に皮肉られた。

父親の源作は、せめて息子だけは自分が苦しんだ世界から抜けでて欲しいと心より願ったが故に、身分不相応と言われても息子を中学校に入学させたかったのである。つましい願いなのである。「息子が中学校を卒業し、高等学校へ入って、出ると工業試験場の技師になって、百二十円の月給を取ることを想像していたのである。」母親は村のしがらみに負けてしまっている。父親の源作はなおも息子に望みをつなごうとする。村役場から税金の取り立てがあった。小川という村議員が、源作に嫌みを云う。源作も村のしがらみに押しつぶされてしまった。

最後の部分は次のようになっている。

源作は畑仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行った。

「チチビョウキスグカエレ」

いきなりこう書いて出した。

帰りには、彼は、何か重荷を下ろしたようで胸がすっとした。

息子は、びっくりして十一時の夜汽車であわてゝ帰ってきた。

三日たって、県立中学に合格したという通知がきたが、入学させなかった。

息子は、いま、醬油屋の小僧にやられている。

以上、「電報」の粗筋を紹介した。何ともやりきれない思いがする。貧乏人はいつまで経っても貧乏のままではいなければならないのであろうか。「分が過ぎる。」という村の掟に背くことはできないのであろうか。

小田切秀雄は以下のように「電報」を評価する。

『電報』は短編小説としてきわめてすぐれたもので、どうあがいてもはい上がれない思い秩序に苦しんでいた農民が、息子を中学に入れることで唯一の打開路をひらくとしてたちまちつぶされる——生活の内的必然的な要求に衝迫されて動きだした人間をめぐって生じざるをえぬ葛藤を通して秩序の非人間性とその重みが照らしだされる関係が、簡潔な確かなペンでとらえられていて、はるか以前からチェホフやメリメや志賀直哉を愛読していたというこの作家の短編小説としての観察力、構合力、描写力を十分に示すものとなっている。⁽³⁾

以上の小田切の評価は鋭く、かつ正確である。終わりの方は志賀の影響を受けているといいいであらう。『清兵衛と瓢箪』の終わりの方に類似していて、しかも傳治らしい結末である。つまり、正確な目とその底に流れる人間的な温かさ、簡潔な表現と緊密な構成は類希な能力を抱持した作家である、といてもいい過ぎではないであらう。

「二銭銅貨」は、筆者も何度か教えた教材である。それ故思い入れもある。主人公の藤二は独楽の紐がなく母親に買ってもらう。切れ端だったから友達に対して劣等感を持つ。牛の番をしつつ、紐を長くしようとする。そして牛に踏

まれて藤二は死んでしまう。十銭の紐を八銭で買った事があだになってしまふ。たった二銭をけちったことによつて子供を死に追いやつた母親の悲しみはどうしようもないのだろうか。重たい問いである。人間は生まれながら平等といつても貧しいということが、こんな悲劇を生むとは。たった二銭のため子供を死に追いやるとは神ならぬ身の人間では分かりようもない。リアルに上京を描き出す腕はさすがである。読者に問いかけているものの、答えは安直には出せない。傳治の作品が抱える問題意識は、深く、重たいが故に時として読むことができなくなることがある。一つひとつの言葉が重たいのである。軽薄な文体が流行する現代文学にあって傳治の作品が問いかける意味は大きいと把握するのであるが、それは筆者だけの思い込みであらうか。

(注)

- (1) 現代日本文学全集 56『葉山嘉樹・黒島傳治・平林たい子集』(筑摩書房 1971年7月) 392~393頁 壺井栄「今日の人—黒島傳治の思い出—」から。
- (2) 『黒島傳治全集 Ⅲ』(筑摩書房 1970年8月) 225~226頁 「小豆島」「田舎から東京を見る」も作品解釈上の参考となる。
- (3) 『黒島傳治全集』(筑摩書房 1970年4月)「解説」として書かれたものの384頁

4. おわりに

大正10年5月21日付の書簡に次のように書く。

宇宙は絶えず創造し、しこうして破壊する。吾々の創造の次には直に破壊がくる。かくて、その間に進歩がある、その後、——吾々神の膝下に到達する、(以下略)

ここに込められている傳治の願いがほの見えて来るように思う。全集のⅡに「詩五編」が掲載される。その一つを取り上げて見る。

薪

薪を盗むものは、
貧乏人に決つると云うので、
俺は、うちの山で伐った薪を持って帰る時にでも、
よその薪を盗んで来るような気持ちになって、
こそこそ帰って来る、

以上の詩に込められる傳治の心の深奥には何があったのだろうか。漁村・農村に、根強く残っている封建的な生き方そのものである。それが傳治には我慢できなかつたのであろう。現代では、傳治が作品を通して主張したことは無くなった、と言っていいのだろうか。形を変え、姿を変えて残っていると主張しなければならないであろう。以上のような意味で黒島傳治の作品を再評価すべきではないだろうか、というのが筆者の結論である。

今回は黒島傳治の作品から、「電報」「二銭銅貨」を中心に論究した。